

日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol. 24 2024年4月1日

巻頭語

日本仏教心理学会第15回学術大会大会長を務めさせていただいて 千石 真理

第15回 学術大会より

1. 第15回大会を終えて 松永 博子
2. 基調講演について
安藤泰至「「いのち」への問いと宗教的課題 —生命倫理問題が私たちに突きつけるもの—」を聴いて 中山 敏子

大河内大博「いのちの共生」を宗教は実現できるのか—地域で生きることの課題に向き合う—」を聴いて 熊田 一雄
3. 大会全体所感 鈴木 康広
4. 書籍紹介
(1) 日本内観学会編『内観法・内観療法の実践と研究』 千石 真理
(2) 佐久間秀範『修行者達の唯識思想』 高橋 直継
5. 研究会・活動報告
日本仏教心理学会分科会について（本年度の教育分科会活動紹介） ケネス 田中・渡邊 美由紀
(1) 歴史分科会 岩瀬 真寿美
(2) 哲学分科会 遠藤 健一郎
(3) 臨床分科会 原口 正

編集後記 岩瀬 真寿美・田邊 英一・松村 一生

巻 頭 語

日本仏教心理学会第15回学術大会大会長を務めさせていただいて

仏教心理学は現代人の「いのち」にどう向き合うのか—

生命倫理と生老病死の現場の視点から

千石 真理 (心身めざめ内観センター・公立鳥取環境大学)

2023年11月18日、日本仏教心理学会第15回学術大会大会長を務めさせていただきました。2020年以来、4度目のオンラインでの開催となりました。新型コロナウイルス感染症の位置づけは5類へと移行しましたが、予断を許さない状況下、大事を取っての決断でした。この度も対面でお会いすることが叶いませんでしたが、参加して下さった皆様には、心より御礼申し上げます。

今回は、「仏教心理学は現代人の『いのち』にどう向き合うのか」を大会テーマに致しました。コロナパンデミックの収束を迎えたかと思いきや、ロシア・ウクライナ、イスラエル・ガザ地区戦争など、世界中で「いのち」について考えない日はないでしょう。ここ、日本にあっては、現在のところ、戦争は勃発してはいないものの、「いのち」への向き合い方が大きく問われています。依然として自死率は高く、日本の10代の死因一位は自殺、と言われるほど、若者が生きづらさを感じ、また、40代、50代男性の自殺率は世界トップクラスです。その他、出生前診断めぐる議論、尊厳死、安楽死法への関心は高まってはいるものの、ヨーロッパ諸国、アメリカに比べ、日本では議論が深められていません。

そこで、大会テーマ「仏教心理学は現代人の『いのち』にどう向き合うのか—生命倫理と生老病死の現場の視点から」に沿って、鳥取大学医学部准教授で、生命倫理、死生学、宗教学がご専門の安藤泰至先生、寺院をソーシャルキャピタルとして、地域の人々を結び、他分野との協働を実践している大阪市の浄土宗願正寺、大河内大博住職のお二人に、基調講演者としてご登壇いただきました。それぞれのご研究、ご活動に基づいた「いのち」、「宗教的課題」への提言をいただいた後、千石を交えた三人でのディスカッション、質疑応答を実施致しました。

安藤先生は、講題を「いのち」への問いと宗教的課題—生命倫理問題が私たちに突きつけるもの—と題され、人の「いのち」という観点から医療・宗教・生命倫理(学)を批判的に問い直している、と前置きをされました。そして、生命倫理学発展の背景には、医療のことをすべて医師に決定させることへの危惧がある。基本線として、患者の自己決定権の重視と、先端医療技術の受容をめぐる社会的コントロールの二つをあげられました。宗教も、生命倫理学も、医療も、「いのちを問う」、「いのちから問う」ことが必要なのだが、生命倫理学では、その根本である「いのちへの問い」が棚上げされることがあるのではないか。そもそも、「倫理」とは、「人が人であること」、「人を人として見る」という本質に関わることであるのに、医学、医療の中には、「人を人として見ない」まなざしが含まれているのでは

ないか、また、医療や宗教は、私たちが「人としてのいのちを生き切れる」ように支えることができているのか？

先生は、最先端医療を駆使した生命の操作に潜む倫理的危うさについて、人工授精や体外受精といった生殖補助技術、IVH、胃ろうなどの人口栄養補給を導入した延命技術、脳死臓器移植の言説システム、そして、生命操作の一部としての安楽死に関して取り上げられ、「いのちへの問い」を展開されました。確かに、現代の医療技術の方向として、人間の欲望をあおる傾向があると、私も感じてきました。それに翻弄されて諦め（明らめ）を忘れ、その結果、大切なものを失うということ、多くの人が気付かないまま経験しているように思います。誰もが幸せに生きたい、良い人生を生きたい、そして良い死を迎えたい、と願うでしょう。それでは、幸せとは、良い人生とは、良い死とは、何なのでしょう。

例えば、出生前診断の向上により、多くの妊婦が胎児のDNA検査を受けるようになりました。その結果、出生前検査が陽性だった夫婦は、障害がある子供を育てるのか、それとも、生命に関わらない状態が原因で子供を中絶することが正しいのかどうか、という、倫理的問題に悩み、苦しむのです。この倫理的問題を考える時、遺伝子操作などを行うことによって、親が望む外見や知力を持たせた子供を作るデザイナーズベイビーに関する議論を思い起こします。また、臓器移植が成功した、と言っても、血栓が脳に飛ぶなどして、その後の人生が手術前には予期せぬことにみまわれることもある。安藤先生のおっしゃる通り、私たちの欲望をあおって推進されていく治療、エンハンスメント。より健康に、より長命に、より高い能力を・・・それが尽きたところで安楽死、尊厳死と称してさっさと死なせる。その前提として、健康で、長命で、高い能力を持つことだけが本当に幸せなのか？良い人生なのか？と考えずにはられません。仏教では抜苦与楽、転迷開悟といいますが、病気でも、短命でも、障害があつたとしても、いや、だからこそ、気づけること、幸せを感じられることがあるのではないのでしょうか。安藤先生は、生命倫理に関し、安楽死や尊厳死は、苦痛に満ちた生、尊厳のないように見える生を終わらせ、死なせることによって、そうした「悪い生」を終わらせて、「良い死」を与える特定の行為である。安楽で尊厳のある死とは言えない、と強調されました。先生は、講演の最後を、「いのちへの問い」は「宗教的」課題。生と死をめぐる宗教的問いは、その問いに答えを与えるというよりも、その問いを抱えた当事者の悲しみ、苦しみに寄り添う宗教者たちの活動が問われる、と結ばれました。私は、これまでの米国でのチャプレンとしての活動、日本で緩和ケア、ビハーラで心のケアに携わった経験を通して、先生のご意見に心より賛同すると共に、医療者が自分なりの死生観を持つことの大切さを実感しています。そして、国策や産業利益と結びついた医療技術や、生命科学の後押しを正当化するための手段として生命倫理学が用いられないためにも、欧米でチャプレンの役割が定着しているように、日本でも医療と宗教、福祉が協働するシステムが構築、実践されるように希求してきました。

日本でも、2013年、「いのちのケア」の担い手として、公益財団法人全国青少年教化協議会を母体とした臨床仏教師の養成が始まり、私もスーパーヴァイザー、特任研究員として務めさせて頂いておりますが、お二人目の登壇者、大河内大博先生は、同じ任務に励む仲間です。そして、この度の“「いのちの共生」を宗教は実現できるのか—地域で生ききるこ

との課題に向き合う”の講題通り、フル稼働で「いのち」を見つめ、「いのち」を繋ぐ役割を、僧侶として担っておられます。そのご活動は、多岐にわたり、「すべての生きとし生けるものの“いのち”を大切にする地域社会の実現」をビジョンに、お寺を軸に訪問看護ステーション、スピリチュアルケア在宅臨床センター、シニア・子供食堂、介護者カフェ、防災プロジェクト、遺族会、親なきあと相談室、助産師と妊産婦を繋ぐプロジェクト、地域安全・防災活動等々が進行中。お寺、地域、多職種、多様な年代で交流、協働し、それぞれの「いのち」を大切に、最期まで自分らしくを支え合う……。本当に私が心配になるほど多くのご活動を、精力的に進行し、飛躍させ、次世代へと繋ぎつつあります。先生の、仏教の形骸化を離れ、本来の宗教の在り方に戻り、地域共生社会を実現しよう、という信念が、着実に実を結びつつあります。頭が下がります。

安藤先生、大河内先生に大変貴重なご講演を頂き、私もチャプレンとしての経験を共有させて頂くなど、三人でディスカッションさせていただきました。その後、改めて思うことは、仏教心理学の「いのち」への向き合い方、社会での役割です。仏教の視点から「いのち」を問い、みつめ、ご縁のある方の信仰に関わりなく心理学の知識、技術を活用して支援することができるのではないのでしょうか。例えば、前述の出生前検査に関してですが、ドイツでは、約1,500の妊娠相談センターがあり、検査で陽性の結果を受け取った妊婦は、包括的な感情面での支援を無料で受けることができます。妊婦たちは、障害を持った子供を育てている母親、そして、胎児を中絶する選択をした女性に会って話を聴くことができるし、ドイツの医師は、出生前検査の結果が陽性だった女性に対し、カウンセリングの機会を与えることを法律で義務付けられています。その一方で、日本では、このような支援体制が十分に確立されていません。医師は処置についての技術的情報を伝えることはできますが、子供の生死を選択しなければならない女性の心理的苦痛に関しては、ほとんどの医師が関わるできません。医師の説明を受けた上で両親は、障害を持って生まれた子供を育てていくのであれば、社会的にどのような支援を受けることができるのか知る必要があります。また、中絶を決めた場合でも、その選択が正しいのかどうか、という苦悩が生じます。いかなる医療分野においても、医学技術の進歩に合わせて突き進む前に、私たちは、実際の支援体制の確立や、「いのち」をどう見るか、という意見交換を社会で実践していく必要があります。その中において、仏教心理学は、重要な役割を果たし得るでしょう。

ご登壇いただいた安藤先生、大河内先生、大会実行委員の松永先生、鮫島先生、運営委員の先生方、いつも学会の維持、運営にご助力いただいております会員の皆様、本年度も学術大会をご支援いただき、本当にありがとうございました。

今後とも、日本仏教心理学会を、どうか宜しく願い申し上げます



1. 第15回学術大会を終えて

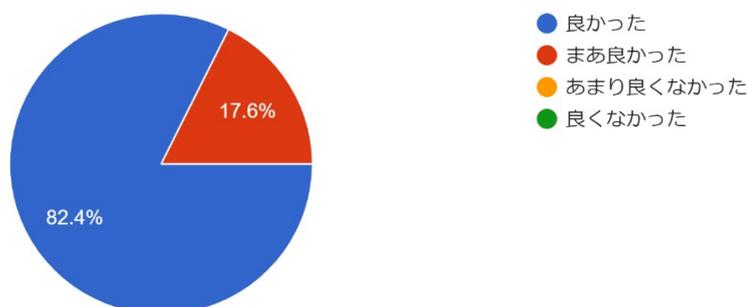
松永博子（日本仏教心理学会 運営委員/学術大会担当）

日本仏教心理学会第15回学術大会は2023年11月18日（土）にオンラインにて開催されました。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響を鑑みてのオンライン開催となりました。「仏教心理学は現代人の「いのち」にどう向き合うのか：生命倫理と生老病死の現場の視点から」が、本学術大会のテーマとして掲げられました。私からは、学術大会参加後のアンケートフォームへの回答を紹介させていただくこととします。

本学術大会へは29名の方（実行委員含む）が第15回日本仏教心理学会学術大会に参加されました。アンケートには17名の方からの回答が寄せられました。

第15回学術大会の印象は全体的にいかがでしたか。

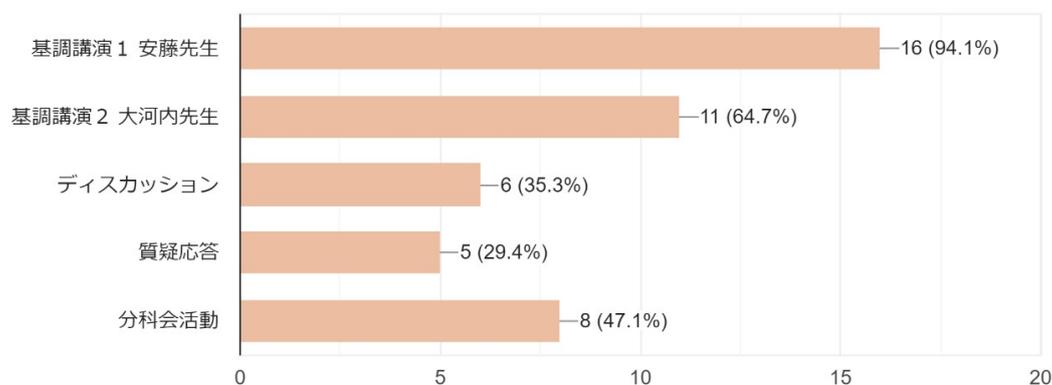
17件の回答



学術大会の印象については、良かった82.4%、まあ良かった17.6%と好意的な評価をいただきました。

興味深かったのはどのプログラムでしたか。（複数回答可）

17件の回答

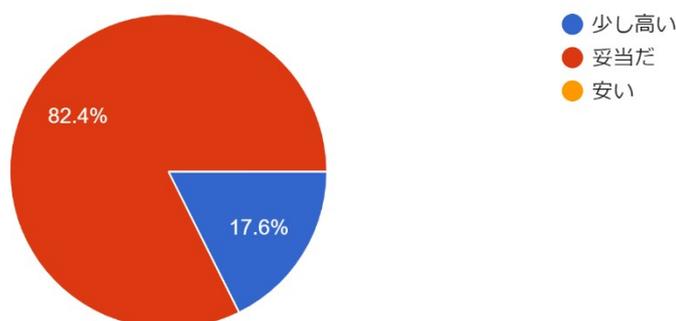


興味深かったプログラム（複数回答）としては、基調講演1の安藤先生が94.1%、基調講

演2の大河内先生が64.7%と高い結果が得られました。私自身も安藤先生、大河内先生の講演にとっても感銘を受け、今後の研究へのヒントをいただきました。

学術大会参加費についてご意見をお聞かせください。

17件の回答



学術大会参加費については、妥当だが82.4%、少し高いが17.6%でした。学術大会参加費についての11件の自由記述への記載の内、学術大会参加費について高いとする内容の書き込みが2件、興味深い貴重な話を聞けたので妥当であるという内容の書き込みが8件、特になしという書き込みが1件でした。

学術大会で取り上げてほしいことについて9件の自由記述の記載の内、仏教と精神医学や心理療法に関する書き込みが2件、グリーフケアに関する書き込みが2件、マインドフルネスに関する書き込み、仏教と日本の教育に関するもの、仏教と心理学の関係性について、海外の仏教心理の動向がそれぞれ1件ずつ、特になしという書き込みが1件という結果でした。次回以降の学術大会を考える上でのヒントとさせていただきます。アンケートにご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

次回の学術大会は、新型コロナウイルス感染症の感染状況により判断することとなりますが、オンライン開催、集合型による対面開催等を検討して参ります。日時等が確定次第、学会ホームページよりご案内させていただきますので、是非、次回のご参加をご検討下さい。

また、2023年度は個人発表への応募がなく会員の皆様の研究を紹介することが出来ませんでした。2024年度の学術大会に向けて会員の皆様の研究を紹介いただきたく、準備をお願いしたいと思います。

最後に、基調講演をいただいた安藤泰至先生、大河内大博先生、大会長の千石真理先生、実行委員の鮫島有理先生の力添えなくしては無事に学術大会を終えることは出来ませんでした。心より御礼申し上げます。

2. 基調講演について

安藤泰至「「いのち」への問いと宗教的課題 —生命倫理問題が私たちに突きつけるもの—」を聴いて

中山 敏子（ナカ社会福祉士事務所、社会福祉士・介護福祉士・認知症ケア専門士）

先ず、安藤泰至先生の自己紹介を拝読し、専門職としてのお立場、主張、そして、個人としての（ここに意味があると思いました。）状況を前提に、講演を受講しました。

私は、福祉職です。1987年、「社会福祉士及び介護福祉士法」が国家資格として制度化されることを知り、また、その時、福祉の専門学校（3年課程）が新設されるのを知り、入学しました。子どもの頃、祖父に大切に育てられたことが、この選択に結びつき、卒後、長く高齢者領域で仕事を続けてきたのだと思います。

生活の中での、たくさんの方の「いのち」に携わってきました。

「いのち」の終わりに関わってきました。多くの方が、自らの「いのち」を愛しみ、慈しんで生きていると、教えられてきました。

年を重ね、今までにない身体的変化に戸惑い、苦しみながらも、「いのち」の危機のむごさを受け入れる力を持っていると、知らされてきました。

医学、医療には、本質的に「人を人として見ない」ようなまなざしが含まれている、大きな悲しみをもちました。これまで、再度、再度、感じてきたことだったからです。

「いのちから」医療と宗教を問う、医療や宗教は、私たちが「人として生きる」（いのちを生き切れる）ように支えることができているのか？

これまで、いつも思ってきました。

「いのち」の危機に医療が介入するのは、通常のこととされても、なぜ、福祉の介入は、重要視されないのだろうか、思ってきました。

「いのち」が今に至る、物語り、ナラティブが、「いのち」を考える時、何より大切だと思います。

「回想法」の研究、実践に携わってきました。（「回想法 中山敏子」で検索）

当初、頑なに心をほどこなかつた方が、ゆっくりと時間をかけ、その方のこれまでに耳を傾け、聴いていくと、ご自身を語りはじめます。人と人をつなげる原点にあるのは、「聴くこと」だと感じてきました。

提示された安藤先生のご著書、読みました。誰であっても、人が「いのち」を操作してよいはずがありません。

「安楽死」、「尊厳死」の意味を改めてしっかり解釈していく、議論していく必要があるのだと思います。

見捨てられる「いのち」があるはずありません。

当事者の痛み、苦しみに、なぜ生きなければならないのか、逃れたいと、辛い決断を選ぶのかもしれない。それでも、人の心は変わる、たくさん経験してきました。その機をつくる、基本にあるのは、「聴くこと」だと思います。

そして、「いのちへの問い」は、私たち一人一人の生きること、そして、死をめぐる「宗教的な」問いにある、ということ、更に考えていきたいと思えます。

私たち福祉職も、「いのちへの問い」は、「宗教的課題」でもあると、心して学んでいく必要があると思えました。

大河内大博 「いのちの共生」を宗教は実現できるのか 一地域で生きることの課題に向き合うー」を聴いて

熊田 一雄（愛知学院大学文学部宗教文化学科教員）

まず、基調講演をなさった大河内大博先生の仏教寺院を拠点とした諸活動のパワフルさに強い感銘を受けた。人口減少社会における仏教寺院の活路は、このように「橋渡し機能」を果たす「社会資本」（パットナム）となることにしかないだろう。かつての福祉社会の「ゆりかごから墓場まで」ではないが、「子ども食堂から認知症の老人のケアまで」、行政とも協力しながら行政の欠落を補う福祉活動の地域社会におけるハブ（拠点）となることに、既成仏教や第3期まで（1970年代以前に教勢の拡大を終えた新宗教）の新宗教の生きる道はないのではないのか。

宗教界のこうした動きは、経済における新自由主義（小さな政府と市場原理主義）と「自己責任」の倫理の浸透に対する、再び1960年代の高度経済成長期までの「助け合い」の精神を復活させようという、日本社会の復元力（レジリエンス）の現れだと思う。ここ数年、日本社会で「子ども食堂」の設立は社会的ブームとなっており、2023年12月時点で、総数は全国で既に9,000を超えたという。私の教えている学生にも、子ども食堂のボランティアに関わっている学生はもう珍しくない。先頃の政府が支給した「コロナ給付金」を寄付に回した日本人は、高齢者よりも若年層に多かった。「シェア文化」の流行に見るように、現代日本の若者は、物質的に豊かだったほんの数十年前に忘れていた「助け合い」の精神を、不器用ながら取り戻しつつあるのではないのか。

仏教寺院は、若者のこうした動きをうまく取り込める地域のハブになってほしい。大河内先生が運営なさっているような「総合福祉センターとしての仏教寺院」は、そうした期待が決して夢物語ではないことを事例として教えているように思った。

3. 大会全体所感 ー第15回 日本仏教心理学会学術大会を振り返ってー

鈴木 康広（佛教大学教育学部臨床心理学科教授・プラクシス鈴木）

2023年11月18日（土）の午後に、第15回学術大会がwebで開催された。コロナ禍でweb開催が当たり前になり、コロナ禍開けとは言え、コロナ禍疲れとweb疲れのためか、参加人数はそれほど多くはなかった。

基調講演は、安藤泰至先生（鳥取大学医学部准教授）による“「いのち」への問いと宗教的課題ー生命倫理問題が私たちに突きつけるものー”、および、大河内大博先生（浄土宗願

生寺住職)による“「いのちの共生」を宗教は実現できるのかー地域で生きることの課題に向き合うー”の二つが行われた。

いずれも貴重な内容の講演で、ディスカッションおよび質疑応答の際に、ケネス田中先生が感激して「貴重な話が聞けて今日参加して良かった」とコメントされたが、参加者全員の気持ちを代弁して頂いたと思われる。いずれも素晴らしい講演であった。

安藤先生は、生命倫理問題として、脳死と臓器移植、生殖医療、安楽死などの具体例を挙げながら、これらが「いのちへの問い」であることを説得力をもって話された。そして同時に「宗教的」課題であることを強調された。1) 信仰のあるなしに関わらず、私たち一人一人の生と死をめぐる「宗教的な(実存的な)」問いであること、2) もちろんそれは「宗教の」課題でもある。そうした問いに答えを与えるというよりも、そうした問いを抱えた当事者の悲しみ、苦しみを一緒に受けとめようとする宗教者たちの活動、3) 合理的に割り切る科学・科学技術に対して「別のまなざし」、すなわち、割り切れないものをそのままに受けとめ、支えること(下線部、筆者)。こうした「宗教的」課題が突きつけられる。要点をまとめると、以上1) 2) 3)になる。

そして同時に、これらは「心理学的」課題でもあるだろう。特に2) 3)の下線部などは、心理療法家・カウンセラーのありようそのものである。われわれ日本仏教心理学会に「宗教的」に、「心理学的」に、突きつけられ託された「課題」であると思われる。学会員がそれぞれの実践の場において銘記すべきであろう。

大河内先生は、まさに自身のお寺(浄土宗願生寺)においての、実践の実例を提示された。寺院を、“居場所”/third place/「器」として提供することにより、訪問看護ステーション・まちの保健室&介護者カフェ・こども食堂&寺子屋・まちの助産婦・防災プロジェクト・障がい者家族との交流の機能をもたせ、“地域で生きること”/「いのちの共生」を実践している。看護師・助産師・ソーシャルワーカー・スピリチュアルカンセラー・学生ボランティア・防災の行政の担当者などとの多職種連携である。「チーム医療」「チーム学校」における様なチームにおける、全体をオーガナイズするチームリーダー/ケアマネージャーであろう。

こうした「いのちの共生」のなかで、一人一人にどう寄り添っていくのかが問われる。寺院という宗教的な「器」のなかで、カウンセリングを含めた心理学的な寄り添いが求められる。これもまた、宗教的かつ心理学的な「仏教心理学」的課題であろう。

最後に付言しておく、貴重かつ実践的な講演内容に参加者は刺激されたようで、質疑応答も活発に行われ、次回以降の学術大会の盛会を期待させるものであった。次回大会への確かなバトンが手渡された手応えを実感させられた。

4. 書籍紹介

- (1) 『内観法・内観療法の実践と研究』 日本内観学会編
真栄城輝明・塚崎実・河合啓介 監修
朱鷺書房 2023年11月 2,200円税込

千石 真理

内観療法は、森田療法と並び、世界に誇る日本生まれの心理療法である。1950年代初頭、浄土真宗僧侶、吉本伊信によって開発され、以来、刑務所、少年院等の矯正施設、精神科、教育の現場等に導入されてきた。1978年に内観学会が設立され、内観の適用の拡大や臨床効果、効能の機序の研究、啓発、研鑽法が議論、研究されてきた。

本書は、学会で認定された医師、心理療法士、面接士を中心に、中国と米国で内観指導に携わる4名を加えた執筆者28名により、内観の歴史、実践方法、研究報告、海外での現状等を一般にも分かりやすくまとめ上げられている。執筆者名は割愛するが、以下の通り、本書内容の一部を紹介する。

第一章 内観と内観法と内観療法について

面接者の所作と心得—内観法の視点から
臨床心理士からみた内観

精神科病院臨床における内観療法 他

第二章 内観の歴史と吉本伊信

内観と吉本伊信の歴史—日本内観学会の誕生まで—
池見酉次郎と吉本伊信と私 他

第三章 内観療法の臨床応用

精神科外来診療における内観療法
アルコール依存症の内観療法 他

第四章 関連領域から見た内観

ユング心理学からみた「内観療法」
仏教からみた内観
成人 ADHD に対する内観 他

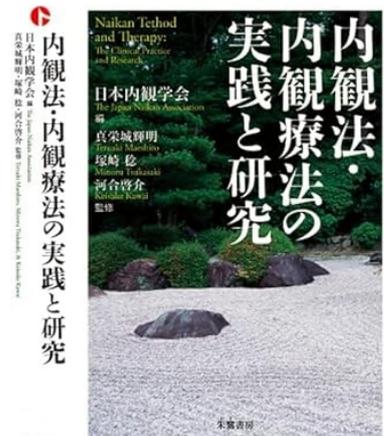
第五章 内観の展開

ヒトのビッグ・ヒストリーとニューロサイエンスから内観を考える
スクールカウンセラーによる内観ワークの実践 他

第六章 海外の内観

中国の諸学会における内観の位置づけ
内観は日本のものですか：アメリカにおける内観と仏教モダニズム 他

第七章 私と内観 私と内観と日本内観学会—内観人名録を企画した経緯—



第四章では、「ユング心理学からみた「内観療法」」を当学会員運営委員の鈴木康広先生が、「仏教からみた内観」を当学会現会長の千石が、それぞれ担当している。

内観療法に関心がある方には、ご一読いただけましたら幸いです。

(2) 『修行者達の唯識思想』 佐久間秀範 著

春秋社 2023年9月 4,070円税込

高橋直継 (元神智学協会ニッポンロッジ会長)

(ニュースレター編集委員会から推薦)

唯識思想に近づこうとする人々には、大きく分けて二つのパターンがあると思われる。

一つは、思想史的に、あるいは、単なる知識として勉強しようとする人々。もう一つは、思想史的な位置づけや理論は抜きにして、ひたすらヴィパッサナ（ヴィパッサナー）等の体験から入ろうとする人々である。

本書は、このどちらにも偏らない、第三のパターンを提示する。すなわち、知識や理論を踏まえつつ、体験(修行)に立ち返ろうとするアプローチである。なぜなら、これらの知識や理論は修行体験から出てきたものであり、それらは本来、追体験されるべきものだからである。

そのようなわけで、本書は唯識思想についてある程度網羅的に学んだ経験のある人々のためのものと言わざるを得ない。

本書の著者である佐久間秀範氏は、実際の瞑想体験を重視すると同時に、その文献的裏付けを重視する。前者は内的な実証であり、後者は外的な実証である。本書では、『中辺分別論』から『唯識三十頌』にいたる唯識文献を一つ一つ丹念に辿りながら、その思想的発展を紹介しつつ、それらを修行者の視点で読み直すことを読者に促す。それによって読者は、かつて学んだこれらの文献を新たな新鮮さをもって味わう体験に導かれるのである。

「修行者の視点」と「一般常識的な視点」の対比というのが本書の基調の一つとなっているが、唯識思想では、この二つの視点がバランスよく提示されていると氏は指摘する。そして、難解とされる唯識の思想内容を自ら「腑に落ちる」ものにするためには、実際の修行実践を通して「修行者の視点」を持つことが不可欠であると主張するのである。

この「腑に落ちる」というのも氏がしばしば用いるキーワードの一つであるが、これは「如理作意（ヨーニショー・マナスカーラ）」という唯識の最も重要な修行実践の直接的な結果であるということを私はここで指摘しておきたい。これもまた、氏のいう「修行者の視点」を持つことで、はじめて理解されることの一つであろう。

5. 研究会・活動報告

日本仏教心理学会分科会について（本年度の教育分科会活動紹介）

新体制のご案内： 日本仏教心理学会 講習会 及び 三つの分科会
ケネス 田中（学会運営委員・研究会担当）
渡邊 美由紀（分科会運営委員）

日本仏教心理学会・勉強会の新しい体制への変更と、申し込み方法についてお知らせ申し上げます。

日本仏教心理学会では、「仏教と心理学の接点を追求する勉強会」を年3回開催しており、現在までに151回の勉強会を行ってまいりました。それに加え、6つの分科会を設け、各人の関心領域を掘り下げる機会を提供してまいりましたが、現在、活動を行っているのは、「教育分科会」のみとなりました。

そのため、2024年度からは、「仏教と心理学の接点を追求する勉強会」と「教育分科会」を統合し、日本仏教心理学会としての勉強会を、下記の通り新たな体制で実施することとなりました。今後も従来通り、年3回、内外部から講師をお招きして講演を行っていきます。

また、現在、「教育分科会」における3つの班（歴史班、哲学班、臨床班）は、1）仏教心理学歴史分科会、2）仏教心理哲学分科会、3）仏教心理臨床分科会として活動を続け、各分野の学びを深めていく機会とします。

名称：日本仏教心理学会 講習会 及び 三つの分科会

日時：毎月第三土曜日 14:00～15:30（2024年4月から実施、10月のみ第二土曜日）

参加費：無料

参加者：日本仏教心理学会の会員でなくても参加できます。

- 仏教心理学に関心のある方はどなたでも年間3回行われる内外講師による講習会に参加できます。
- さらに深く勉強したい方は、次の三つの分科会のいずれかに所属してください。
 - 1）仏教心理学歴史分科会
 - 2）仏教心理哲学分科会
 - 3）仏教心理臨床分科会分科会は、内外講師による3回の講習会以外に、年間7回開催されます。

参加方法：下記の申込サイトにある申込書に必要事項を入力し、送信してください。ご登録いただいた方には、毎回Zoomリンクを含む詳細の案内をお送りいたします。講習会だけに参加をご希望の方は、講習会のみを選択してください。講習会と分科会の両方に参加をご希望の方は、

希望する分科会

仏教心理学歴史分科会 仏教心理哲学分科会 仏教心理臨床分科会

のいずれかにチェック☑を入れてください。

申込サイト：<https://form.os7.biz/f/a2c21e9a/>



開催方法：Zoomによるオンライン開催

開催予定日：

- 4月20日 内外部講師による講習会 井上ウィマラ先生「仏教的スピリチュアルケア」
- 5月18日 分科会
- 6月15日 分科会
- 7月20日 分科会
- 8月17日 休み
- 9月21日 分科会
- 10月12日 内外部講師による講習会 蓑輪顕量先生
- 11月16日 分科会
- 12月21日 分科会
- 1月18日 内外部講師による講習会（講師未定）
- 2月15日 分科会
- 3月15日 休み

今後は、より多くの方々に仏教心理学という分野について知っていただき、参加者に応じた柔軟な方法で勉強できる場と、交流を深める場を提供していきたいと考えております。さらに、日本仏教心理学会の活動の活性化と、会員の増員にも努めてまいります。以上、この改革を行う趣旨をご理解いただき、ぜひご参加いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

(1) 歴史分科会

岩瀬 真寿美 (教育分科会ゼミ勉強会歴史班班長)

2021年8月から開始した「歴史班」では、仏教と心理学の両者に関わる文献を特にわが国の研究を中心に歴史的に並べ、仏教宗派、心理療法別に記すとともに、個々の文献の概要を整理することから始めてきました。そこでは100を超える文献を共有ドキュメントとして見える化し整理しました。2022年秋頃からは、仏教心理学の歴史を大きく把握するとともに、過去の研究から学ぶ視点も大事にしようという「歴史班」の目的を共有しました。

2023年2月以降は、仏教と心理学に関わる著作について丁寧に時間をかけてメンバーが報告する形式をとっています。現在は、太田さん、嵩さん、長島さん、岡田さん、岩瀬、田邊さん、佐藤さんの順で、碧海寿広著『科学化する仏教』の輪読を実施しています。1月のゼミ勉強会では、長島さんから、第2章「催眠術と仏教」の概要について発表がありました。今後、内容は、密教、禅、ニューサイエンスと進んでいく予定です。

併せて、メンバーによる個別の研究報告、たとえば現在の臨床心理学の定義や活動体系、臨床心理学の成立や発展の歴史、それらに影響を与えた時代背景などを共有しています。この間に、ケン・ウィルバーのインテグラル理論や、『仏教と心理学の接点——浄土心理学の提唱』（藤能成編著、法蔵館、2016）、『仏教心理学——意識バイアスから自由になるための六つのメソッド』（西田隆男、智玄舎、2022）、「密教カウンセリングの手引き」（平井巽、高野山真言宗教学部、1972年）などの発表を共有しています。

今後、歴史班は仏教心理学歴史分科会に名称を変えます。「文献を共有することにより、各メンバーの各研究に資する」という「歴史班」発足当初の目的を大事にしつつも、一方で、活動内容はその時々メンバーの興味関心に柔軟に沿いながら、さらに活動を意義ある活発なものにしていきたいと考えていますので、関心のある方はぜひご一報ください。

(2) 哲学分科会

遠藤 健一郎 (教育分科会ゼミ研究会哲学班班長)

以前より教育分科会ゼミ研究会ではケネス田中先生の「縁起的主体性」や岡野守也先生の「唯識心理学」を学んできました。これらを踏まえ、仏教と心理学の特性を再認識し、融合を図ることでの仏教心理学構築を目指して、ゼミ研究会内に哲学班が作られました。班の顧問はケネス田中先生と大住誠先生です。

ケネス田中先生には、岡野守也先生の論文「仏教心理学の構築に向けて」の再検討による考察と、今後の岡野唯識の発展可能性を示していただきました。また、大住誠先生には、河合隼雄の「自然モデル」をあえて「他力モデル」として、治療者の「対自的關係性」を重視した「瞑想箱庭療法」に関する理論と技法を教えてくださいました。

班員の発表は、遠藤健一郎、渡邊美由紀さん、須川雅之さんの順に行っています。まず、遠藤

健一郎が、斎藤慶典による「世界の存在構造」と唯識三性説を対比させ、存在構造は「空」から「現象」、さらには「実体」へと進展すること、「縁起」は「現象」の次元での特徴だが、「主体」は実体的認識がかかわる可能性もあることを述べました。これに対して、渡邊美由紀さんは、「主体性」は真実に気づき・目覚め、生きていく土台であるとの立場から、「縁起的主体性」に関して、「健全性と不健全性」、「独在と共在」、「共性あつての個性」という比喻や表現を示し、「人生の縦軸・横軸」、華嚴經の視点、分別／無分別の観点からこの検討を行いました。そして、「縁起的主体性」の考察が仏教の真髓へと向かい、深い理解につながるのみならず、日常生活にも応用でき、実践的な生き方の指針となり、世界平和への手がかりとなることを示されました。また、須川雅之さんは、人間の心は実体的存在ではなくプロセス的存在であるとし、知覚・感情・行動などのプロセスの理解のため、従来のアプローチのみならず、脳科学やベイズ統計学も用いて、事前分布の平坦化という具体的方法が有効であるという「心の数学的な解釈に基づいた覚りへの道筋」を考察しています。

今後、哲学班は仏教心理哲学分科会となることが決まりましたので、さらに仏教心理学における哲学的方略を深めることができるものと思います。

(3) 臨床分科会

原口 正 (教育分科会ゼミ研究会臨床班班長)

仏教心理学会教育分科会の臨床班は、まだ始まってから時間もそれほど経っておらず、この半年は試行錯誤の時期でした。メンバーは少数ですが、精神科医、カウンセラー、僧籍のある方など様々なバックグラウンドと持ち、それぞれのバックグラウンドから、関心のあるフィールドについて研究に対する意見がありました。

いくつかの例を挙げると、仏教とどのように出会い、そのことによって自分自身がどのように影響を受け、それが活動している現場での実践に影響しているか、またターミナルケアでのかかわり方などがあります。その他、仏教思想の中で瑜伽唯識派の思想からみた認知行動療法の理論解釈なども議論されました。

心理臨床という言葉は幅が広く、いわゆる精神分析や認知行動療法のような心理療法から、ターミナルケアやビジネスの世界でのマインドフルネスなど、取り留めなくなってしまうくらいはありました。そこで、今後は、仏教と心理療法に関連するテキストを分担購読し、共通のテーマを勉強しつつ、それぞれのメンバーが各自興味のあるテーマを深めていくこととする予定です。

初めは、瑜伽唯識派と心理療法の接点として『唯識と論理療法 仏教と心理療法・その統合と実践』（岡野守也著、佼成出版社、2004年）と進化心理学から仏教（マインドフルネス）に関心を持つようになった科学ジャーナリストの著作である『なぜ今、仏教なのか——瞑想・マインドフルネス・悟りの科学』（ロバート・ライト著、早川書房、2020年）をテキストとして選びました。

また、これまでの教育分科会臨床班は仏教心理臨床分科会として活動していく予定です。また、メンバーも少なく、仏教や心理学に詳しくないという方のご参加も歓迎いたします。遠慮なく、お問い合わせください。」

編集後記

今回、ニュースレター編集委員としてはじめて担当させていただきました岩瀬と申します。普段、仏教系の大学で中高の教職を目指す学生の授業を主に担当しておりますが、最近、日々の教育相談の中に仏教思想が示唆する可能性を感じ、それを理論として構築することに関心があります。2023年度の本学会大会では、仏教心理学が医療や福祉の現場でも着目されてきていることに大きな気づきをいただきました。今後も会員のみなさまから学ばせていただきたく、宜しく願い申し上げます。

岩瀬真寿美（同朋大学社会福祉学部）

私がこれまでに会った印象深い話の数々を、今回から編集後記として一つずつ紹介させていただきますと思います。

初めての今回は、歌手の武田鉄矢さんのお話で、実際にあったエピソードです。小学校の理科の授業のできごと。先生と二人の生徒の会話です。

先生：「氷が融けると、何になるか、答えられる人は手を上げて！」

よくできる子：一番に手を上げて、「はい。水になります」、と答えた。

先生：「ハイ、正解。よくできました」、と言うと・・・あまり理科が得意でない子が、おずおずと手を上げた。

先生：「もう、正解は出たけど、それでも言いたいことはあるの？」

あまりできない子：もじもじしながら、「僕は、氷が融けると、春になると思います」と。

私はこのエピソードのこの子どもの答えが、なんとも氷という自然現象の中に生命の息づかいが感じられ、大好きです。こんなふうには世の中は、答えは一つでは、ないんだなあ、いろいろな見方があって自由でいいんだ、と思いました。

田邊 英一（臨床心理士、公認心理師）

ニュースレターの編集は、いつも春の気配を感じさせる時期にやってきます。春は、別れと出会いの季節ですね。先日、勤務先の歓送迎会に参加するため予約した店まで行く途中、港区芝にある二天門の前を通りました。日比谷通りに面したこの門は、7代将軍徳川家継の霊廟の惣門だったそうです。300年の時を越えて門を守っているのは、多聞天と広目天です。今は亡き学会創設時のメンバーであった大須賀発蔵先生は、多聞天を傾聴：Active Listeningを象徴する者としておられたのを思い出しました。カウンセラーの守り神です。してみると、広目天は気づき：Awarenessの象徴かもしれませんね。皆様の春が、素敵な出会いに満ちていますように。

松村一生（日本産業カウンセラー協会・シニア産業カウンセラー）